

市民意見表明記入用紙

案件：「伊丹市公立高校入学者選抜制度検討委員会」答申書（素案）

住所：伊丹市松ヶ丘2丁目6-1

氏名：上原 秀樹

意見：「学校教育に関する市民意識調査」で、「改善と見直しを合わせた声が49.4%と現状維持の3倍にのぼった」とされるが、「総合選抜制度」そのものを変えるべきとするのは23.7%で、「現状のまま」と「改善すべき点がある」は「総合選抜制度そのものを変えるべき」とする意見ではない。「現状のまま」か「改善すべき」をあわせると、「総合選抜制度」維持は42%で、「新しい制度に変える」の23.7%を大きく上回っている。

さらに、年齢別にみると、18～19歳で「現状のまま」か「改善すべき」をあわせると80.9%、20～29歳で「現状のまま」か「改善すべき」をあわせると60.8%と、かなり高い水準となっている。子ども中心に受験制度を考える場合、大いに参考にすべきことである。

仮に高校選抜制度の見直しをするならば、「総合選抜制度」を維持しながら改善すべきところがあれば改善するというのが、「市民意識調査」の結果ではないのか。

「総合選抜制度」の問題点として挙げられている、「中学生にとって学習意欲の低下に関係している」との指摘について。

神戸大学の土屋規教授がおこなった「入試制度および通学学区制度の社会的心理的影響に関する調査研究」では、入試を意識して、勉強する、授業をまじめにする」と答える中学生の割合は、どの学区でも変わりがなことが明らかです。むしろ「受験に備えて」という動機付けで学習させる教育では、競争から落ちこぼれたり、遅れをとった段階で、生徒たちは学ぶことをやめてしまう。受験競争に勝った生徒でも、受験が終わった段階で、「学ぶことへの興味・関心」を失ってしまうことになる。受験競争を激しくすればするほど「勉強嫌い」の子どもができることになるのではないのか。

「複数志願選抜制度」について

「行きたい学校を自由に選べる」というが、実際には自分が受かりそうな学校しか選べない。第1志望は500点満点に25点が加算されるが、第2志望は第1志望の生徒より25点低い点数で勝負することになり、まるでギャンブルだと評した人もいるほど、どの高校を選択するか生徒・保護者を悩ませているのが現状。

「自由に選べる」どころか、逆に子どもを混乱に陥れるものである。

結論として、伊丹学区での総合選抜制度を堅持し、総合選抜制度のメリットを生かし、その中で教育上の工夫・改善をするべきである。

この制度は、学区内の学校間隔差を最小限に抑え、過度の受験競争から中学生を解放してきた。また、学力や将来への希望、価値観などの点でも多様な生徒たちが集まることにより、生徒たちは豊かな学習環境の中で自分の力を伸ばすだけでなく、お互いに助け合い、影響しながら育っている。また「地域の学校」として地域の人々からも期待や関心が寄せられている。是非残してほしい。